

3月の園だより

2019年3月
吉野幼稚園
園長 郡山 健次郎

主 題：良く育った

聖書のことば：「光の子として歩みなさい」

(エフェソの信徒への手紙5：8)



3月のみことばは上記のように短いものですが、とくに卒園していく子供たちにとっては、はなむけの言葉としてふさわしいものです。「光の子として歩みなさい」だけでは何となくぶっきらぼうな感じがしますが、8節全体は次のようになっています。「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて光となっています。光の子として歩みなさい。」

闇と光は私たちの現実の姿です。自分の中にもあります。自分本位という闇。自分の中に喜びを生まないどころか人の喜びをも奪ってしまいます。小学4年生のわが子の命を奪ったのは他人ではなく両親だったと聞いて、誰もが愕然としたのはつい最近のことです。あれほどの闇の深さはないとしても、同質の闇があることを認めないわけにはいきません。

自分本位という闇は、かねては静かで無害ですが、思い通りに事が運ばなかったり、自分の意のままにならない現実と直面したりすると突然暴れだします。これは自然な反応なので、いわゆる「悪いこと」ではありません。しかし、「返事の仕方が悪い！」と怒ったり、逆に目の前の人を無視したりして気まずい雰囲気になったりします。そういう状況になるのは「よくないこと」で、社会では「パワハラ」として処罰の対象になったりもします。

パウロは、そんな私たちに「光の子として歩みなさい」というのです。闇を照らすのは光です。パウロが言う光とはイエス様のことにほかなりません。かつては、キリスト教徒を逮捕投獄し殺害していた闇の権化のような自分がそのキリストから許されたという体験はパウロを180℃違う人間に変えました。それはイエス様の十字架処刑に遡ります。イエス様が、自分をはりつけの刑に処したローマの官憲を呪うのでもなく、むしろ「父よ、彼らをおゆるしてください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ23:34)と祈ったことを知ったパウロは光の子に変えられたのでした。

「光の子」とは、聖書の慣用語みたいなもので、違いを認めることのできる心の広さを言います。人の良さを素直に認め喜ぶことのできる円満な人格を指す言葉です。それこそモンテッソーリ教育が目指している理想の姿です。ですから、カトリック幼児教育連盟から毎月届く機関紙のタイトルも「ひかりの子」になっています。

子供に願う前に、私たち大人がまず自分の闇に直面して自分の弱さを認めながらも、父母のみなさんが神様から託された親としての使命を果たす力と知恵も授かっていることを認めて受け入れるなら、みなさんもまた「光の子」になるというわけです。どんな事にも動じない「親力」がつくことでしょう。

最後になりましたが、ご卒園と進級おめでとうございます。親子ともども「光の子」となって「よく育った！」ことを祝う日々であるよう祈ります。

